

男女への人権侵害の現状 —実態調査結果の分析—

児童学部 児童学科 石川 義之

要旨：われわれは、2008年に1009名の男女（有効回答数750名）を対象に、「ジェンダーに関するアンケート」を実施した。本稿では、このアンケート調査結果を踏まえて、ドメスティック・バイオレンスの見聞、身体的虐待、性的虐待、ドメスティック・バイオレンス、セクシュアル・ハラスメントという5種の人権侵害被害の現状を分析する。第1に、それぞれの人権侵害被害ごとにその普及率や相談の有無などについて分析する。第2に、これらの5種の人権侵害被害を包括した全体についての総合的考察を行う。ここでは、人権侵害被害全体が性別、年齢などのデモグラフィックな要因とどのような関係にあるのか、また家庭の貧困や家庭・職場でのストレスとどのように関連しているかなどが検討される。人権侵害被害の総合的全体分析を試みた点に本稿の独自性が見出せるであろう。

キーワード：ドメスティック・バイオレンスの見聞、身体的虐待、性的虐待、ドメスティック・バイオレンス、セクシュアル・ハラスメント

はじめに

本稿では、アンケート調査結果を踏まえて、ドメスティック・バイオレンスの見聞（子ども虐待の1つである心理的虐待に属する）、身体的虐待、性的虐待、ドメスティック・バイオレンス、セクシュアル・ハラスメントという5種の人権侵害行為を取り上げ、それぞれについて実態を見るとともに、これら5種を包括した全体について総合的分析を試みる。

これらの個々の実態に関しては多くの調査研究が行われており、多大な知見が蓄積され、多様な対応も試みられているところである。しかし、これまでに蓄積された知見は、調査研究の様態によって多様であり、それに応じて対策もまちまちで、必ずしも首尾一貫した統一的対策が採られているとは言い難い。まだまだいずれの人権侵害行為についても知見をさらに蓄積していくべき段階にあり、実態把握のための試行がつけられていくべき状況にある。つまり、さらに調査を積み重ね、より真実に近い実態像に迫ることがいまだ課題でありつづけている。この課題達成に向けての1つの材料提供が本調査研究の第1の狙いである。多くの調査が実施されてきたとはいえ、それぞれの人権侵害行為に関する真相はまだ明らかになってはいない。その真相解明のための素材提供ということが本研究の目指すところの1つなのである。真相に近づくことに

よってこそ対策も確実性を帯びてくるであろう。

さらに、DV見聞、身体的虐待、性的虐待、DV、セクハラは、相互に独自性をもつと同時に、人権侵害行為として相互に共通性をもち、有機的な連続体を形作っている。したがって、これらを1つの統一体として総合的に分析することも必要である。人権侵害行為を構成する一つ一つをそれぞれに考察することも意義あることだが、統一体として全体分析を試みることも肝要なのである。本稿では、紙幅の関係で簡単にならざるをえないが、こうした総合的全体分析も試みる。こうした総合的全体分析は、人権侵害行為に関わる調査研究の今後の方向を指し示すのもである。本稿で試みる全体分析はそうした方向への1つの鉄入りの試みである。ここに本研究の第2の狙いがある。

本研究は、1,009人（有効回答数750人）というかなりの数の対象者に対して行われたもので、有意性・有効性をもつと考えるが、サンプルの抽出の仕方などに問題があり、本調査研究の結果をそのまま一般化することはできない。しかし、それぞれの被害実態の解明のための材料提供という狙いと、人権侵害行為の有機的全体分析という狙いの一部は、回答者の方々の真摯な情報提供の姿勢と、それを主観を交えず客観的に分析するという態度によって果たせたと信じるものである。

1. 調査実施の概要及び回答者の属性

1-1. 調査対象者：大学生、高校生、専門学校生、大学事務員、その他さまざまな職種の人、計 1009 人。

1-2. 調査方法：調査票法（自計式調査票法）。

1-3. 調査時期：2008 年 10 月 15 日～11 月 24 日。

1-4. 有効回答数／対象者数×100＝有効回答率：750 名／1009 名×100＝74.3%。

男性の回答率；34.8%（261 名）。女性の回答率；64.9%（487 名）。性別無回答；0.3%（2 名）。

1-5. 回答者の属性

(1) 年齢：10 歳代；217 名（28.9%）、20 歳代；413 名（55.1%）、30 歳代；29 名（3.9%）、40 歳代；39 名（5.2%）、50 歳代以上；46 名（6.1%）、不明；6 名（0.8%）。平均値；24.5 歳。中央値；20.0。最頻値；20.0。標準偏差；10.9。範囲；63.0。最小値；15.0。最大値；78.0。

(2) 性別：男性；261 名（34.8%）、女性；487 名（64.9%）、不明；2 名（0.3%）。

(3) 現在の同居者（有効数 742、%はケースのパーセント）：配偶者；111 名（15.0%）、同棲のパートナー；13 名（1.8%）、息子・娘；87 名（11.7%）、孫；6 名（0.8%）、子どもの配偶者；2 名（0.3%）、実父；352 名（47.4%）、実母；377 名（50.8%）、義父；10 名（1.3%）、義母；12 名（1.6%）、祖父母；123 名（16.6%）、自分のきょうだい；297 名（40.0%）、配偶者のきょうだい；3 名（0.4%）、ひとり暮らし；199 名（26.8%）、その他 21 名（2.8%）。

(4) 子ども時代（18 歳未満）の同居者（有効数 745、%はケースのパーセント）：父親；719 名（96.5%）、母親；733 名（98.4%）、兄弟姉妹；673 名（90.3%）、祖父；233 名（31.3%）、祖母；313 名（42.0%）、おじ・おば；38 名（5.1%）、その他；10 名（1.3%）。

(5) 子ども時代（18 歳未満）の主な養育者（保護者）（有効数 744）：実父；360 名（48.4%）、実母；347 名（46.6%）、養父・継父；4 名（0.5%）、養母・継母；0 名（0.0%）、祖父；3 名（0.4%）、祖母；27 名（3.6%）、兄；2 名（0.3%）、姉；0 名（0.0%）、その他の親族；0 名（0.0%）、親族以外；1 名（0.1%）。

(6) 子ども時代の居住地（有効数 745）：商業地域；23 名（3.1%）、工業地域；7 名（0.9%）、

住宅地域；435 名（58.4%）、農村地域；137 名（18.4%）、アパート・マンション団地；90 名（12.1%）、漁村地域；10 名（1.3%）、山間地域；36 名（4.8%）、その他の地域；7 名（0.9%）。

(7) 子ども時代に家庭が貧しいと感じたことはあるか（有効数 734）：貧しいと感じたことはある；163 名（22.2%）、ない；571 名（77.8%）。

(8) 家庭が貧しいことでストレスを感じたか（子ども時代）（有効数 164）：非常に感じた；19 名（11.6%）、感じた；62 名（37.8%）、あまり感じなかった；63 名（38.4%）、全く感じなかった；20 名（12.2%）。

(9) 現在、家庭が貧しいと感じるか（有効数 719）：貧しいと感じる；161 名（22.4%）、ない；558 名（77.6%）。

(10) 家庭が貧しいことでストレスを感じるか（現在）（有効数 159）：非常に感じる；26 名（16.4%）、感じる；57 名（35.8%）、あまり感じない；61 名（38.4%）、全く感じない；15 名（9.4%）。

(11) 職業：学生；578 名（77.1%）、主婦・主夫；43 名（5.7%）、会社員；56 名（7.5%）、公務員；9 名（1.2%）、自営業；9 名（1.2%）、その他；36 名（4.8%）、不明；19 名（2.5%）。

(12) 職場でストレスを感じるか（有効数 686）：非常に感じる；47 名（6.9%）、感じる；204 名（29.7%）、あまり感じない；322 名（46.9%）、全く感じない；113 名（16.5%）。

(13) 家庭でストレスを感じるか（有効数 720）：非常に感じる；29 名（4.0%）、感じる；124 名（17.2%）、あまり感じない；329 名（45.7%）、全く感じない；238 名（33.1%）。

2. 子ども時代における父母間の暴力の見聞

2-1. 子ども時代の父母間の暴力の見聞の有無

表 1-1 あなたが子ども時代（18 歳未満）に父親と母親間の暴力を見たり聞いたりしたことがありますか。

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	135	18.0	18.2	18.2
	いいえ	606	80.8	81.8	100.0
	合計	741	98.8	100.0	
欠損値	無回答	9	1.2		
合計		750	100.0		

回答者が子ども時代（18 歳未満）に父母間の暴力を見聞した経験の有無については、無回答を除く有効パーセントについて見ると、見聞した経験が「ある」18.2%、「ない」81.8%であった（表 1-1）。

父母間の暴力の見聞は、児童虐待防止法で子ども虐

待の1形態をなすものと見なされているが、これが2割弱を占めていることになる。

2-2. 父母間の暴力の方向

表1-2 それはどちらからの暴力でしたか。

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	父親から母親へ	116	15.5	87.9	87.9
	母親から父親へ	11	1.5	8.3	96.2
	双方から	5	.7	3.8	100.0
	合計	132	17.6	100.0	
欠損値	非該当	1	.1		
	無回答	617	82.3		
	合計	618	82.4		
合計		750	100.0		

見聞した父母間の暴力（＝ドメスティック・バイオレンス）の方向については、「父親から母親へ」が圧倒的に多く87.9%を占め、「母親から父親へ」は8.3%、「双方から」は3.8%にすぎない（表1-2）。

2-3. 父母間の暴力の形態

表1-3 それは主にどのようなものでしたか。（○は1つ）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	叩く・殴る・蹴る・つねる・噛む	47	6.3	35.6	35.6
	怒鳴る・罵る	67	8.9	50.8	86.4
	束縛する	1	.1	.8	87.1
	その他	17	2.3	12.9	100.0
	合計	132	17.6	100.0	
欠損値	非該当	618	82.4		
	無回答	750	100.0		

見聞した父母間の暴力の形態については、「怒鳴る・罵る」が最も多く50.8%、以下、「叩く・殴る・蹴る・つねる・噛む」35.6%、「その他」12.9%、「束縛する」0.8%となっている（表1-3）。「性的なことを無理矢理させる」は0%であった。

2-4. 相談の有無

表1-4 あなたはそのことを誰かに相談しましたか。

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	24	3.2	18.0	18.0
	いいえ	109	14.5	82.0	100.0
	合計	133	17.7	100.0	
欠損値	無回答	617	82.3		
	合計	750	100.0		

父母間の暴力の見聞について誰かに相談したかという相談の有無については、「相談した」18.0%、「相談しなかった」82.0%で、「相談しなかった」が圧倒的多数を占めている（表1-4）。

2-5. 相談した場合の相手

表1-5 主に相談した相手は誰ですか。（○は1つ）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント	
有効	母親	1	.1	4.2	4.2	
	祖父母	4	.5	16.7	20.8	
	兄弟姉妹	7	.9	29.2	50.0	
	友達	6	.8	25.0	75.0	
	学校以外のカウンセラー	1	.1	4.2	79.2	
	恋人	1	.1	4.2	83.3	
	その他	4	.5	16.7	100.0	
	合計	24	3.2	100.0		
	欠損値	非該当	726	96.8		
		無回答	750	100.0		

相談した場合の相手については、「兄弟姉妹」が最も多く29.2%、次いで「友達」の25.0%、以下、「祖父母」「その他」16.7%、「母親」「学校以外のカウンセラー」「恋人」4.2%となっている（表1-5）。

「父親」「学校の教師」「スクールカウンセラー」「配偶者」は0であった。

3. 子ども時代における養育者による身体的虐待の被害経験

3-1. 子ども時代における身体的虐待の被害経験の有無

表2-1 あなたが子ども時代（18歳未満）に養育者から叩かれたり、殴られたり、蹴られたり、つねられたりしたことがありますか。

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	305	40.7	41.0	41.0
	いいえ	438	58.4	59.0	100.0
	合計	743	99.1	100.0	
欠損値	無回答	7	.9		
	合計	750	100.0		

子ども時代（18歳未満）において、養育者から叩かれたり、殴られたり、蹴られたり、つねられたりしたことがあるかどうかについては、有効パーセントについて見ると、そうした経験が「ある」者41.0%、「ない」者59.0%であった（表2-1）。

養育者から叩かれたり、殴られたり、蹴られたり、つねられたりした経験は、養育者による身体的虐待の被害経験を意味しているが、この身体的虐待の被害経験をを持つ者が4割強を占めていることになる。

3-2. 身体的虐待の主な加害者

表2-2 それは主に誰からですか。（○は1つ）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	実父	130	17.3	43.3	43.3
	実母	126	16.8	42.0	85.3
	養父・継父	1	.1	.3	85.7
	祖父	2	.3	.7	86.3
	祖母	3	.4	1.0	87.3
	兄	6	.8	2.0	89.3
	姉	3	.4	1.0	90.3
	その他	29	3.9	9.7	100.0
	合計	300	40.0	100.0	
	欠損値	非該当	1	.1	
無回答		449	59.9		
合計		450	60.0		
合計		750	100.0		

身体的虐待の加害者については、「実父」が最も多く43.3%、次いで「実母」の42.0%、以下、「その他」9.7%、「兄」2.0%、「祖母」「姉」1.0%、「祖父」0.7%、「養父・継父」0.3%とつづいている（表2-2）。「養母・継母」は0であった。

3-3. 相談の有無

子ども時代における養育者による身体的虐待被害について誰かに相談したかという相談の有無については、

表 2-3 あなたはそのことを誰かに相談しましたか。

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 はい	45	6.0	15.2	15.2
いいえ	251	33.5	84.8	100.0
合計	296	39.5	100.0	
欠損値 無回答	454	60.5		
合計	750	100.0		

「相談した」15.2%、「相談しなかった」84.8%で、「相談しなかった」が圧倒的多数を占めている（表 2-3）。

3-4. 相談した場合の相手

表 2-4 主に相談した相手は誰ですか。（○は1つ）

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 父親	2	.3	4.3	4.3
母親	17	2.3	37.0	41.3
祖父	2	.3	4.3	45.7
兄弟姉妹	3	.4	6.5	52.2
友達	10	1.3	21.7	73.9
学校の教師	4	.5	8.7	82.6
スクールカウンセラー	2	.3	4.3	87.0
恋人	1	.1	2.2	89.1
その他	5	.7	10.9	100.0
合計	46	6.1	100.0	
欠損値 無回答	704	93.9		
合計	750	100.0		

相談した場合の相手については、「母親」が最も多く37.0%、次いで「友達」の21.7%、以下、「その他」10.9%、「学校の教師」8.7%、「兄弟姉妹」6.5%、「父親」「祖父」「スクールカウンセラー」4.3%、「恋人」2.2%とつづいている（表 2-4）。「学校以外のカウンセラー」「配偶者」は0であった。

4. 子ども時代における性的虐待の被害経験

4-1. 子ども時代における性的虐待の被害経験の有無

表 3-1 あなたが子ども時代（18歳未満）に性的いやがらせを受けたことがありますか。

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 はい	54	7.2	7.3	7.3
いいえ	689	91.9	92.7	100.0
合計	743	99.1	100.0	
欠損値 無回答	7	.9		
合計	750	100.0		

子ども時代に性的いやがらせを受けたことがあるかどうかについては、有効パーセントについて見ると、「ある」者7.3%、「ない」者92.7%となっている（表 3-1）。ここで性的いやがらせを受けたとは、性的虐待の被害経験を意味するから、以上から、子ども時代における性的虐待の被害経験者が7%強を占めていることが分かる。

4-2. 子ども時代における性的虐待の被害経験の内容

表 3-2 その内容は主にどのようなものでしたか。（○は1つ）

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 無理矢理キスをされた	3	.4	5.7	5.7
性的な言葉でからかわれた	6	.8	11.3	17.0
衣服の上から体を触られた	27	3.6	50.9	67.9
無理矢理セックスをされた	1	.1	1.9	69.8
着替えや入浴をのぞかれた	5	.7	9.4	79.2
その他	11	1.5	20.8	100.0
合計	53	7.1	100.0	
欠損値 無回答	697	92.9		
合計	750	100.0		

性的虐待の被害経験の内容については、「衣服の上から体を触られた」が最も多く50.9%、次いで「その他」の20.8%、以下、「性的な言葉でからかわれた」11.3%、「着替えや入浴をのぞかれた」9.4%、「無理矢理キスをされた」5.7%、「無理矢理セックスをされた」1.9%となっている（表 3-2）。

「その他」の中には、「痴漢」「盗撮」「露出」「服を脱がされた」などが含まれている。

4-3. 性的虐待の加害者

表 3-3 それは主に誰からですか。（○は1つ）

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 実父	2	.3	3.8	3.8
見知らぬ人	35	4.7	66.0	69.8
その他	16	2.1	30.2	100.0
合計	53	7.1	100.0	
欠損値 無回答	697	92.9		
合計	750	100.0		

性的虐待の加害者については、「見知らぬ人」が最も多く66.0%、次いで「その他」の30.2%、その次が「実父」の3.8%となっている（表 3-3）。「その他」の中身は、「友達」「先輩」「アルバイト先の者」「父の友人」「知人」などである。

「実父」による性的虐待はインセスト（近親姦）に当たるが、このインセストが3割強にのぼることが示されている。

なお、「実母」「養父・継父」「養母・継母」「祖父」「祖母」「兄」「姉」は皆無であった。

4-4. 相談の有無

表 3-4 あなたはそのことを誰かに相談しましたか。

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 はい	29	3.9	54.7	54.7
いいえ	24	3.2	45.3	100.0
合計	53	7.1	100.0	
欠損値 無回答	697	92.9		
合計	750	100.0		

子ども時代における性的虐待被害について誰かに相談したかという相談の有無については、「相談した」54.7%、「相談しなかった」45.3%で、「相談した」が過半に達している（表 3-4）。

4-5. 相談した場合の相手

表 3-5 主に相談した相手は誰ですか。（○は1つ）

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 母親	9	1.2	31.0	31.0
兄弟姉妹	1	.1	3.4	34.5
友達	8	1.1	27.6	62.1
学校の教師	3	.4	10.3	72.4
恋人	1	.1	3.4	75.9
その他	7	.9	24.1	100.0
合計	29	3.9	100.0	
欠損値 無回答	721	96.1		
合計	750	100.0		

相談した場合の相手については、「母親」が最も多く31.0%、次いで「友達」の27.6%、以下、「その他」24.1%、「学校の教師」10.3%、「兄弟姉妹」「恋人」3.4%となっている(表3-5)。「父親」「祖父母」「スクールカウンセラー」「学校以外のカウンセラー」「配偶者」は0であった。

「その他」の中身として、「警察」を挙げた者が5名いた。

5. ドメスティック・バイオレンスの被害経験

5-1. ドメスティック・バイオレンスの被害経験の有無

表4-1 あなたは配偶者や恋人からいやがらせを受けたことがありますか。

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 はい	58	7.7	7.8	
いいえ	684	91.2	92.2	100.0
合計	742	98.9	100.0	
欠損値 無回答	8	1.1		
合計	750	100.0		

配偶者や恋人からいやがらせを受けた経験の有無、つまりドメスティック・バイオレンスの被害経験の有無については、有効パーセントについて見ると、被害経験が「ある」者7.8%、「ない」者92.2%で、ドメスティック・バイオレンスの被害経験「なし」が圧倒的多数を占めている(表4-1)。

5-2. ドメスティック・バイオレンスの被害経験の内容

表4-2 それは主にどのようなものでしたか。(○は1つ)

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 叩く・殴る・蹴る・つねる・噛む	11	1.5	19.0	19.0
怒鳴る・罵る	12	1.6	20.7	39.7
束縛する	17	2.3	29.3	69.0
性的なことを無理矢理させる	5	.7	8.6	77.6
その他	13	1.7	22.4	100.0
合計	58	7.7	100.0	
欠損値 無回答	692	92.3		
合計	750	100.0		

ドメスティック・バイオレンス(以下、DVと表記する場合あり)の被害経験の内容としては、「束縛する」が最も多く29.3%、次いで「その他」の22.4%、以下、「怒鳴る・罵る」20.7%、「叩く・殴る・蹴る・つねる・噛む」19.0%、「性的なことを無理矢理させられる」8.6%とつづいている(表4-2)。

「その他」の中には、「ストーカー行為」「ものを投げる・壊す」などが挙げられている。

5-3. 加害行為に対する許容度

表4-3 あなたはその行為を許せますか。

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 はい	10	1.3	17.9	17.9
いいえ	46	6.1	82.1	100.0
合計	56	7.5	100.0	
欠損値 無回答	694	92.5		
合計	750	100.0		

5-2のような加害行為をあなたは許せるかという、加害行為に対する許容度については、「許せる」17.9%、「許せない」82.1%となっており、8割強が「許せない」としている(表4-3)。

5-4. 相談の有無

表4-4 あなたはそのことを誰かに相談しましたか。

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 はい	39	5.2	70.9	70.9
いいえ	16	2.1	29.1	100.0
合計	55	7.3	100.0	
欠損値 無回答	695	92.7		
合計	750	100.0		

配偶者や恋人によるドメスティック・バイオレンス被害について誰かに相談したかという相談の有無については、「相談した」70.9%、「相談しなかった」29.1%で、「相談した」が7割強を占めている(表4-4)。

5-5. 相談した場合の相手

表4-5 主に相談した相手は誰ですか。(○は1つ)

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 父親	1	.1	2.6	2.6
母親	3	.4	7.7	10.3
友達	32	4.3	82.1	92.3
その他	3	.4	7.7	100.0
合計	39	5.2	100.0	
欠損値 無回答	711	94.8		
合計	750	100.0		

相談した場合の相手については、「友達」が最も多く82.1%、以下、「母親」「その他」7.7%、「父親」2.6%となっている(表4-5)。

「祖父母」「兄弟姉妹」「学校の教師」「スクールカウンセラー」「学校以外のカウンセラー」「恋人」「配偶者」は0となっている。

6. ドメスティック・バイオレンスの加害経験

6-1. ドメスティック・バイオレンスの加害経験の有無

表5-1 あなたは配偶者や恋人にいやがらせをしたことがありますか。

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 はい	51	6.8	8.0	8.0
いいえ	585	78.0	92.0	100.0
合計	636	84.8	100.0	
欠損値 無回答	114	15.2		
合計	750	100.0		

配偶者や恋人に対していやがらせをしたことがあるかという、ドメスティック・バイオレンスの加害経験の有無を尋ねたところ、有効パーセントについて見ると、8.0%の者が「加害経験あり」と回答している(表5-1)。

6-2. ドメスティック・バイオレンスの加害経験の内容

加害経験の内容について見ると、「怒鳴る・罵る」

表5-2 それは主にどのようなものでしたか。(○は1つ)

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
叩く・殴る・蹴る・つねる・噛む	11	1.5	22.4	22.4
怒鳴る・罵る	17	2.3	34.7	57.1
束縛する	9	1.2	18.4	75.5
性的なことを無理矢理させる	1	.1	2.0	77.6
その他	11	1.5	22.4	100.0
合計	49	6.5	100.0	
欠損値	701	93.5		
合計	750	100.0		

が最も多く 34.7%、以下、「叩く・殴る・蹴る・つねる・噛む」「その他」22.4%、「束縛する」18.4%、「性的なことを無理矢理させる」2.0%であった(表5-2)。「その他」としては、「ちょっかい」「電話をかける」「無視」「メール」などが挙げられている。

7. セクシュアル・ハラスメントの被害経験

7-1. セクシュアル・ハラスメントの被害経験の有無

表6-1 あなたは社内・学校・アルバイト先などでいやがらせを受けたことがありますか。

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
はい	92	12.3	12.4	12.4
いいえ	651	86.8	87.6	100.0
合計	743	99.1	100.0	
欠損値	7	.9		
合計	750	100.0		

社内・学校・アルバイト先などでいやがらせを受けたことがあるかについては、有効パーセントで見ると、いやがらせを受けたことが「ある」者 12.4%、「ない」者 87.6%となっている(表6-1)。ここでいういやがらせはセクシュアル・ハラスメント(以下、「セクハラ」と表記する場合あり)に該当するから、セクシュアル・ハラスメント被害経験者が1割強にのぼることになる。

7-2. セクシュアル・ハラスメント被害の内容

表6-2 それは主にどのようなものでしたか。(○は1つ)

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
体を触られる	22	2.9	24.2	24.2
性的な話を聞かされる	13	1.7	14.3	38.5
性的なことを質問される	10	1.3	11.0	49.5
無理やりデートに誘われる	7	.9	7.7	57.1
給料の増減や出世を理由に肉体重験をせまられる	1	.1	1.1	58.2
アルバイトなどことを質問される	21	2.8	23.1	81.3
その他	17	2.3	18.7	100.0
合計	91	12.1	100.0	
欠損値	659	87.9		
合計	750	100.0		

セクシュアル・ハラスメント被害の内容については、「体を触られる」が最も多く 24.2%、次いで「アルバイトなどことを質問される」の 23.1%、以下、「その他」18.7%、「性的な話を聞かされる」14.3%、「無理矢理デートに誘われる」7.7%、「給料の増減や出世を理由に肉体重験をせまられる」1.1%とつづいている(表6-2)。「その他」の中身としては、「完全無視」「同性からのいやがらせ」「うわさを流される」「ストーリー」「言葉の暴力」などが挙げられている。

7-3. セクシュアル・ハラスメントの加害者

表6-3 それは主に誰からですか。(○は1つ)

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
会社の上司	19	2.5	20.9	20.9
会社の同期	3	.4	1.1	22.0
学校の先生	1	.1	3.3	25.3
学校の先輩	11	1.5	12.1	38.5
学校の同級生	20	2.7	22.0	60.4
アルバイト先の店長	19	2.5	20.9	81.3
アルバイト先の先輩	1	.1	1.1	82.4
アルバイト先の後輩	16	2.1	17.6	100.0
その他	91	12.1	100.0	
合計	659	87.9		
欠損値	750	100.0		

セクシュアル・ハラスメントの加害者については、「アルバイト先の店長」が最も多く 22.0%、次いで「会社の上司」「アルバイト先の先輩」20.9%、以下、「その他」17.6%、「学校の同級生」12.1%、「学校の先生」3.3%、「会社の同期」「学校の先輩」「アルバイト先の後輩」1.1%となっている(表6-3)。

「その他」としては、「アルバイト先の客」などの「客」が多く挙げられている。

7-4. 相談の有無

表6-4 あなたはそのことを誰かに相談しましたか。

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
はい	55	7.3	59.8	59.8
いいえ	37	4.9	40.2	100.0
合計	92	12.3	100.0	
欠損値	658	87.7		
合計	750	100.0		

セクシュアル・ハラスメント被害について誰かに相談したかという相談の有無については、「相談した」59.8%、「相談しなかった」40.2%で、「相談した」が過半に達している(表6-4)。

7-5. 相談した場合の相手

表6-5 主に相談した相手は誰ですか。(○は1つ)

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
母親	4	.5	7.3	7.3
兄弟姉妹	1	.1	1.8	9.1
友達	28	3.7	50.9	60.0
学校の教師	1	.1	1.8	61.8
カウンセラー	1	.1	1.8	63.6
恋人	4	.5	7.3	70.9
配偶者	1	.1	1.8	72.7
その他	15	2.0	27.3	100.0
合計	55	7.3	100.0	
欠損値	695	92.7		
合計	750	100.0		

相談した場合の相手については、「友達」が最も多く 50.9%、次いで「その他」の 27.3%、以下、「母親」「恋人」7.3%、「兄弟姉妹」「学校の教師」「カウンセラー」「配偶者」1.8%となっている(表6-5)。「その他」としては「上司」「同僚」「バイト先の仲間・店長」などが挙げられている。

「父親」「祖父母」は0であった。

8. 被害の全体分析

8-1. DV 見聞、身体的虐待、性的虐待、DV、セクハラ被害の得点合計

表 7-1-1 統計量

DV 見聞、身体的虐待、性的虐待、DV、セクハラ被害の合計

度数	有効	748
	欠損値	2
平均値		.8610
中央値		1.0000
最頻値		.00
標準偏差		.98960
範囲		5.00
最小値		.00
最大値		5.00
合計		644.00

表 7-1-2 DV 見聞、身体的虐待、性的虐待、DV、セクハラ被害の合計

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	.00	344	45.9	46.0
	1.00	232	30.9	31.0
	2.00	114	15.2	15.2
	3.00	51	6.8	6.8
	4.00	4	.5	.5
	5.00	3	.4	.4
合計		748	99.7	100.0
欠損値	システム欠損値	2	.3	
合計		750	100.0	

DV 見聞、身体的虐待、性的虐待、DV、セクハラ
のそれぞれについて、「被害経験あり」に 1 点、「被害
経験なし」に 0 点の得点を与えて、合計得点を算出し
た。最小値 0 点、最大値 5 点である。平均値は 0.86
となった（表 7-1-1）。

これらのうち、どの被害も受けたことがない「被
害経験全くなし」が 46.0%、「1 種の被害経験あり」
31.0%、「2 種あり」15.2%、「3 種あり」6.8%、「4 種
あり」0.5%、「5 種あり」0.4%であった（表 7-1-2）。

8-2. 被害経験の有無（全体）

表 7-2 DV 見聞、身体的虐待、性的虐待、DV、セクハラ被害の有無（全体）

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	被害経験全くなし	344	45.9	46.0
	被害経験少なくとも 1 種以上あり	404	53.9	54.0
	合計	748	99.7	100.0
欠損値	システム欠損値	2	.3	
合計		750	100.0	

DV 見聞、身体的虐待、性的虐待、DV、セクハラ
のうち、どの被害も受けたことのない「被害経験全く
なし」は 46.0%、「被害経験少なくとも 1 種以上あり」
は 54.0%であった（表 7-2）。

9. 考察 — 人権侵害被害の総合的分析 —

DV 見聞（心理的虐待）、身体的虐待、性的虐待、
DV、セクハラという 5 種の人権侵害被害について総
合的考察を行う。主として、これらの 5 種の被害を総
合した「被害の有無（全体）」を各種の項目とクロス
させて有意差の検定を試みる。

9-1. 被害経験の有無（全体）の男女差

被害経験の有無（全体）の男女差については、「被
害経験全くなし」は男性に多く（47.9%）、「被害経験
少なくとも 1 種以上あり」は女性に多い（55.1%）。
人権侵害被害はしばしば女性に多いと見られているが、
本調査でも「被害 1 種以上あり」は僅かであるが女性
のほうに多くなっている。ただし、この差は統計的有
意に達していない。

9-2. 被害経験の有無（全体）の年齢差

被害経験の有無（全体）の年齢差については、「被
害経験全くなし」は「50 代以上」に最も多く（62.2%）、
つづいて「10 代」に多い（53.9%）。「被害経験少な
くとも 1 種以上あり」は「20 代」に最も多く（59.6%）、
つづいて「40 代」および「30 代」に多い（それぞれ
55.3%、55.2%）。これらの関係は $p < .01$ で統計的に
有意である。「10 代」と「20 代」とで被害経験率が分
かれるので、「若い世代」に人権侵害被害が多いとはい
えない。

9-3. 被害経験の有無（全体）と職業

被害経験の有無（全体）と職業との関係については、
「被害経験全くなし」は「主婦・主夫」に多く（60.5%）、
「被害経験少なくとも 1 種以上あり」は「自営業」つづ
いて「会社員」に多かった（それぞれ 66.7%、64.3%）。
ただし、これらの関係は統計的有意に達していない。
人権侵害被害に職業による差はないといえそうである。

9-4. 被害経験の有無（全体）と子ども時代の居住地
域

被害経験の有無（全体）と子ども時代の居住地と
の関係については、「被害経験全くなし」は「山間地
域」に多く（52.8%）、「被害経験少なくとも 1 種以上
あり」は「その他の地域」に多かった（85.7%）。た
だし、これらの関係は統計的有意に達していない。巷
間に言われているように人権侵害被害が「農漁村地域」
に少ないという傾向は認められない。

9-5-1. 被害経験の有無（全体）と子ども時代の主
観的階層帰属（貧富感）

被害の有無（全体）と子ども時代の主観的階層帰属
（貧富感）との関係については、「被害経験全くなし」
は、子ども時代に家庭が貧しいと感じたことが「ない」
者に多く（50.1%）、「被害経験少なくとも 1 種以上
あり」は「ある」者に多い（68.1%）。この関係は
 $p < .001$ で統計的に有意である。子ども時代に貧困家

庭に育つことが人権侵害被害を受けることに影響を与えていることが見て取れる。

9-5-2. 被害経験の有無（全体）と貧しさからくるストレスの程度

被害経験の有無（全体）と家庭の貧しさからくるストレスの程度との関係については、「被害経験全くなし」はストレスを感じる程度が低く、「被害経験少なくとも1種以上あり」はストレスを感じる程度が高かった。この関係は線型的である。ただし、この関係は統計的有意に達していない。

9-6-1. 被害経験の有無（全体）と現在の主観的階層帰属（貧富感）

被害経験の有無（全体）と現在の主観的階層帰属（貧富感）との関係については、「被害経験全くなし」は、現在家庭が貧しいと「感じていない」者に多く（49.5%）、「被害経験少なくとも1種以上あり」は「感じている」者に多い（65.8%）。この関係は $p \leq .001$ で統計的に有意である。現在貧困家庭に所属していることも人権侵害被害の発生に関与していることが読み取れる。

9-6-2. 被害経験の有無（全体）と貧しさからくるストレスの程度

被害経験の有無（全体）と貧しさからくるストレスの程度との関係については、「被害経験全くなし」は、現在の家庭の貧しさからくるストレスを「全く感じていない」が最も多く（40.0%）、「被害経験少なくとも1種以上あり」は「感じる」が最も多い（71.9%）。ただし、この関係は統計的有意に達していない。

9-7. 被害経験の有無（全体）と職場で自分に降りかかるストレスの程度

被害経験の有無（全体）と職場で自分に降りかかるストレスの程度との関係については、「被害経験全くなし」は、職場で自分に降りかかるストレスを「感じている」度合いが低く、「被害経験少なくとも1種以上あり」は「感じている」度合いが高い。この関係は線型的であり、 $p < .01$ で統計的に有意である。ただし、この被害の有無（全体）と職場でのストレスとの有意な関係は、原因と結果を特定しない。人権侵害被害を受けたことが職場でのストレスの原因なのか、逆に職場でのストレスが被害の原因なのかは判別できない。

9-8. 被害経験の有無（全体）と家庭で自分に降りかかるストレスの程度

被害経験の有無（全体）と家庭で自分に降りかかるストレスの程度との関係については、「被害経験全くなし」は、家庭で自分に降りかかるストレスを「全く感じない」が最も多く（50.4%）、「被害経験少なくとも1種以上あり」は「非常に感じる」が最も多い（89.7%）。この関係は $p \leq .001$ で統計的に有意である。ただし、ここでも人権侵害被害経験の有無と家庭でのストレスとの間の因果関係は不明である。

表8 被害の有無（全体）と性別、年齢、職業、居住地域、子ども時代の家庭の貧困度、子ども時代の家庭の貧困からくるストレス、現在の家庭の貧困度、現在の家庭の貧困からくるストレス、職場でのストレス、家庭でのストレスとのクロス分析

クロス	値 (χ^2)	自由度	有意確率	判定
×性別	0.592	1	0.488	n. s.
×年齢	15.424	4	0.004	$p < .01$
×職業	7.403	5	0.192	n. s.
×子ども時代の居住地域	5.179	7	0.638	n. s.
×子ども時代の家庭の貧困度	16.880	1	0.000	$p < .001$
×貧困からくるストレス	5.274	3	0.153	n. s.
×現在の家庭の貧困度	11.775	1	0.001	$p \leq .001$
×貧困からくるストレス	1.699	3	0.637	n. s.
×職場でのストレス	12.181	3	0.007	$p < .01$
×家庭でのストレス	16.771	3	0.001	$p \leq .001$

おわりに

本稿では、DV 見聞、身体的虐待、性的虐待、DV、セクハラ の5種の被害（加害）の現状を、われわれの調査結果から見てきた。

それぞれの被害（加害）の実態については多くの調査知見が公表されているが、サンプルの採り方によって明らかになる実態も異なってくるであろう。1,009人を対象に実施したわれわれの調査から得られた知見も確かなリアリティの一面を伝えてくれるはずである。ここに本研究の第1の意義がある。

DV 見聞、身体的虐待、性的虐待、DV、セクハラ のそれぞれに関する個別の調査は多く行われてきたが、これらの5種の人権侵害被害の実態を総合的に明らかにしたものは少ない。本稿では、この5種の被害をひっくるめた全体を分析対象として、簡単ではあるが、総合的考察を試みた。人権侵害被害として相互に有機的な関連をもち、多くの共通項をもつこれらの行為を包括して取り扱う試みは、これからも進められていくべき1つの方向であろう。本調査研究はその方向に沿ったささやかな鋭入的試みである。このような鋭入を試みた点に、本研究のもう1つの意義を見出せるで

あろう。

今後、この線に沿った調査研究をいっそう進めていきたいと期するものである。

謝辞

750名の回答者のみなさんに、答えにくい質問に誠実にお答えいただいたことに関して、衷心より御礼申し上げます。

また、大学等における集合調査にご協力いただいた先生方にも心から謝意を表します。

さらに、調査票作成段階でアドバイスをいただいたIPU 環太平洋大学の小宅理沙さんにもお礼を申し上げます。

付記

本稿で分析した「ジェンダーに関するアンケート」は、大阪樟蔭女子大学人間科学部人間社会学科4回生(当時)の駒沢愛音、種村佳芳里、土倉香織の3氏の協力のもとに実施された。3氏の献身的な働きに対して敬意を表します。

なお、本アンケート調査は、2008年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成費の交付を受けて実施されたものであることを付言します。

[完]

[参考文献]

- 石川義之編著, 2003, 『性的被害の現在——関西コミュニティ調査報告』女性のトラウマを考える会。
- 石川義之, 2004, 『親族による性的虐待——近親姦の実態と病理』ミネルヴァ書房。
- 石川義之編著, 2006, 『心理的=情緒的虐待に関する実証的研究——大阪コミュニティ調査報告書』家庭における子どもの福祉を考える会。
- 石川義之編著, 2009, 『ネグレクト(保護の怠慢・拒否)に関する実証的研究——関西圏大学生調査報告』子どもの人権・福祉を考える会。
- 石川義之, 2011, 『身体的虐待被害の実態——大学生・専門学校生調査から』『大阪樟蔭女子大学研究紀要』1: 171-185。
- 藤本修編著, 2005, 『暴力・虐待・ハラスメント——人はなぜ暴力をふるうのか』ナカニシヤ出版。
- 「夫(恋人)からの暴力」調査研究会, 2002, 『ドメスティック・バイオレンス [新版]』有斐閣。
- 中下裕子・福島瑞穂・金子雅臣・鈴木まり子, 1991, 『セクシュアル・ハラスメント』有斐閣。
- 日本DV防止・情報センター編, 2005, 『ドメスティック・バイオレンスへの視点 [新版]』朱鷺書房。
- 渡辺和子編著, 1994, 『女性・暴力・人権』学陽書房。
- Miller-Perrin, Cindy and Perrin, Robin, 2007, *Child Maltreatment: An Introduction, 2nd. ed., the United States, London and New Delhi: Sage Publications.*

The Original States of Human Rights Abuses against Men and Women: The Analyses of the Results of Investigation into the Actual Conditions

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences
Yoshiyuki ISHIKAWA

Abstract

We did a survey about "gender" of 1,009 Men and Women in 2008 (valid respondents; 750). In this paper we analyze the original states of five human rights abuses: Hearing and Watching of domestic violence, Physical Child Abuse, Sexual Child Abuse, Domestic Violence and Sexual Harassment, according to the results of our survey. First, we analyze prevalence of each human rights abuse, whether victims have consulted with others about experience of each human rights abuse or not, and so on. Second, we do the synthetic analyses of the total which includes five human rights abuses. In this context we consider how the total relates to demographic factors such as sex and age, how the total relate to the poverty of families and the stresses in families and workplaces, and so on. The originality of our paper is mainly found in trying to do the synthetic analyses of the total of human rights abuses.

Keywords: Hearing and Watching of domestic violence, Physical Child Abuse, Sexual Child Abuse, Domestic Violence, Sexual Harassment